

10 まとめと課題

- 内閣府の調査に参加した。「ネットワーク分析」と呼ばれる若者の社会関係の現状を分析するものであった。
= 生きづらさや自己否定を語るより、能動的に依存できる若者を

- 結論

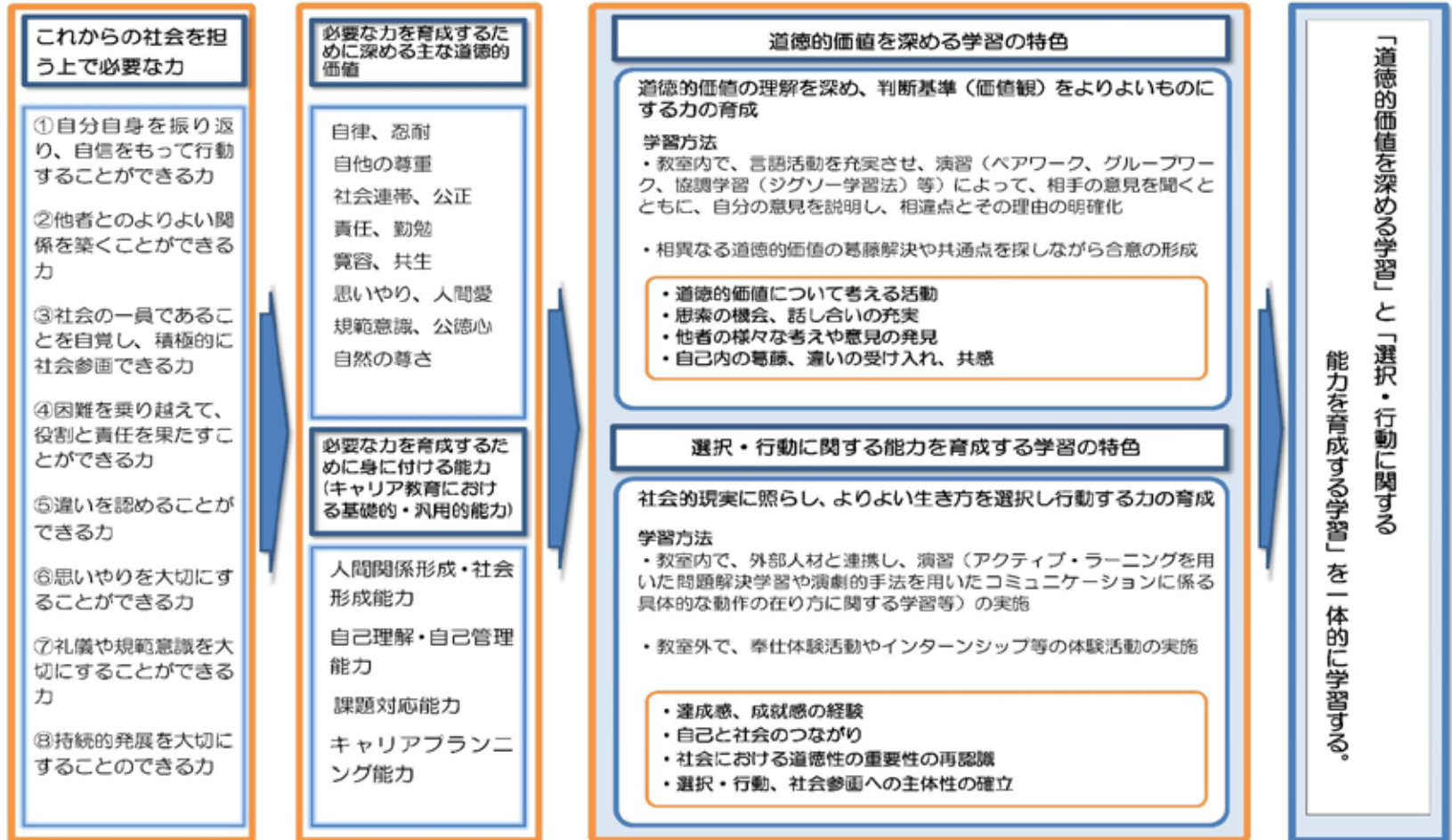
「多くの他者とのコミュニケーションが緊密であり、さまざまな場を居場所と感じ取れる若者群の存在を指摘してきた。ここでは、一種群のように、家庭でのコミュニケーションに多くを依存し広がりがない若者層が、概して基点となる家庭についても多種群より低い評価をしていることを指摘した。多元的な関係性のもつ「生きやすさ」の効用を指摘することができる。」

(古賀 = 平成29年版子供・若者白書へも転載)

- 社会学者ブルデューも指摘するように、「知り合い承認している者同士の、制度化された持続的関係のネットワークを所有することによる、個人や集団に蓄積される現実的仮想的資源の総和」と社会関係資本を定義しておくことができる。個々人の能力を超えた他者との関係の力が若者の行動特性や将来生活を変えていくという見方であり、新たな資本の価値と獲得の戦略を示唆する点で重要である。

「人間と社会」の実践例

人間としての在り方生き方に関する新教科「人間と社会（仮称）」における
 「道徳的価値を深める学習」と「選択・行動に関する能力を育成する学習」の一体化について



プロジェクト・アドベンチャーで チームづくりを体感して ドラマケーションで表現を学ぶ

東京都立町田総合高校

2年生の総合選択科目で コミュニケーション授業を実施

町田総合高校は2010年に開校した都内9番めの総合学科高校。同校の総合選択科目は、「暮らし」「まち」「ひと」「自然」の4つの系列に分かれている。そのなかの「ひと」系列の指定科目になっているのが、「コミュニケーション」。2年生を対象に年間70時間、2単位の授業を展開する。実施日は、毎週木曜日の1・2時限め。

「人とのかわり方をもとと広げ、人と人との関係において心の使い方や気持ちを汲み取る力を伸ばしたい。そう考えて、2010年の開校に際し、コミュニケーションスキルをアップさせる授業を設けたのです」とは、同校の開校準備室のメンバーとしてこの授業を考え、実施してきた体育科の山室俊浩先生。

「コミュニケーション」の授業は、家庭科・福祉科・体育科の3教科の教員が分担して受けもつ。家庭科が担当する保育の現場体験と、福祉科が担当する高齢者や障

がい者施設などの訪問、そして体育科が担当するプロジェクト・アドベンチャーとドラマケーションに大きく分かれる。

前期に家庭科と福祉科の授業を受けた生徒は後期に体育科の授業を受けた生徒は後期に家庭科と福祉科の授業を受ける。さまざまなお人となりに「コミュニケーション」を深められるので、生徒の人気の高い。

「2年生は全部で240人いるのですが、そのうち100人がこの授業を選択します。志望者はもっと多いのですが、マンパワ一的に100人が今のところ限界で、将来的に保育士や介護など人とのコミュニケーションが重要な仕事をやつてみたい生徒を優先しています」

仲間を信じ、自分を信じる 「コミュニケーション」

このなかで特に今回は、体育科のプロジェクト・アドベンチャーとドラマケーションのプログラムを取り上げた。

町総コミュニケーション授業のグラントルール

以下のルールを、毎回授業の際には確認し、振り返りシートにもできていたかどうかを問うことを徹底した。

<本気(マジ)で>

目の前の出来事、問題から逃げずに、できる・できないを考えるのではなく、すべてのことに全力で挑戦しよう。

<みんなで>

ひとりで悩まない。チーム全員で挑戦しよう。

<安全に>

安全(身体)、安心(心)な環境で挑戦できるよう、自らその環境をつくろう。

<話す>

上手に話さなくていい。自分のペースで、自分の話したいように話してみよう。正直に素直に話そう。

<聴く>

真剣に聴こう。耳だけでなく身体、心、全身で聴こう。同調しなくていい。「?」と思ったことはそう伝えよう。「!」と思ったこともそう伝えよう。内容以外のメッセージも聴く。どんなふう話しているのか、声のトーン、表情なども聴こう。

ドラマケーション の事例

- 崎山(2008)が指摘するように、学校現場を含めて支援問題を巡る「臨床的展開」(心への支援・関係性の重視・当事者視点など)は拡大し続け、大別して2つの流れに向かってきた。
- 第1は、現場で実際に困難な社会生活を送る当事者の子ども若者への改善効果を意識した、臨床心理学的アプローチを含む実践の支援である。もう一つは、社会病理学的な知を処方箋とした改良主義のアプローチである。前者が、心に病を抱える人々に矯正の方法論や場を提示するのに対して、後者は福祉や労働など制度的資源を欠いている人々にそれを是正する施策や場を提供することになっている。両者は、ロジックにおいて共通しており、介入や解決のよりよい達成が当事者の幸福に貢献するという前提に立っている。
- しかしながら、困難を有する当事者の経験にどれほど寄り添うことができるのかというもとの問いは依然残っていく。いじめの心理相談に躊躇する子ども若者がいるように、回復の論理がむしろ苦しみの増幅となる事例もある。同様に、貧困家庭の経済援助が行きわたっても、虐待等の家族の喪失体験からずっと解放されない若者の事例もある。困難体験をどのように経験的に把握可能なのか何を支援とするかが、問われる。

- いじめなど個別の課題が先鋭で重ければ重いほど、総体的な広い問題群と支援戦略とを結び付ける視点は形成されにくい。
- あるいは、支援の評価が制度的政策的な目標に向かうと、問題を一義的にとらえた効果測定の見点ばかりが強まる傾向もある。
- 社会参加へ向かうための関わりでの履歴や意思決定のあり方など困難を有する若者当事者の認識にまで踏み込んで、問題と支援の相互関係を構造的に読み解く臨床的な理解がいま問われている。

< 講演者の文献 >

- 古賀正義、2001『<教えること>のエスノグラフィー - 「教育困難校」の構築過程』金子書房
- 古賀正義2006「問題の個人化を越えて:教育困難校と刑務所での改善指導研究を通して考えること」財団法人矯正協会(法務省)『刑政』117巻16-22
- 古賀正義、2008「学校研究の現在」、『教育学研究』第75巻1号、46-54頁
- 古賀正義、2010『高卒フリーターにとっての「職業的能力」とライフコースの構築』本田由紀編『労働再審1・転換期の労働と<能力>』大月書店
- 古賀正義、2010「『教育困難』と教師の実践」、近藤博之・岩井八郎編『現代教育社会学』、有斐閣、153-170頁
- 古賀正義、2012「ひきこもりとその家族の社会学的研究 - 『ひきこもる若者たちと家族の悩み』調査の結果から - 」、中央大学『教育学論集』第54集、1-30頁
- 古賀正義、2013「『思いやりを育てる環境』の危機を問う」、『児童心理』第67巻10号、金子書房、1-9頁

- 広田照幸、古賀正義、伊藤茂樹編、2012『現代日本の少年院教育—質的調査を通して』、名古屋大学出版会、286-319頁
- 古賀正義、2013「生活指導のメカニズム—集団生活に埋め込まれた個への働きかけを読み取る」、広田照幸、後藤弘子編『少年院教育はどのように行われているのか—調査から見えてくるもの』、矯正協会、85-108
- 古賀正義、2013「ソーシャルスキルとは何か—困難高校卒業後の就職をめぐるエスノグラフィ」『現代思想』(特集・就活のリアル)41巻5号、133-142頁
- 古賀正義、2015「高校中退者の排除と包摂—中退後の進路選択とその要因に関する調査から—」、『教育社会学研究』第96集、47 - 67頁
- 古賀正義、2016「高校中退者問題と格差社会」志水宏吉ほか編『第2巻 社会のなかの教育』岩波書店
- 古賀正義、2016「学校空間における排除と差別」好井裕明編『排除と差別の社会学』有斐閣
- 古賀正義、2017「偏位する「社会的孤立」 - その意味と課題」内閣府『子供若者の意識に関する調査報告書』140-145
- 古賀・石川編著、2018『ひきこもりとその家族の社会学』世界思想社
- 古賀正義、2018「学校と子ども・若者支援」稲垣恭子、内田良編著『教育社会学のフロンティア2 変容する社会と教育のゆくえ』岩波書店

< 参考文献 >

雨宮処凛、萱野稔人、2008、『生きづらさについて』、光文社

伊藤茂樹、2002、『青年文化と学校の90年代』、『教育社会学研究』第70集

Willis,P., 1977,“Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs” Columbia University Press。(=熊沢誠訳、1985、『ハマータウンの野郎ども:労働への従順、学校への反抗』筑摩書房)

岡邊健編、2014、『犯罪・非行の社会学 -- 常識をとらえなおす視座』、有斐閣

貴戸理恵、2011、『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに——生きづらさを考える』、岩波書店

菅野盾樹、1997、『いじめ 学級の人間学』、新曜社

鈴木翔2012『教室内(スクール)カースト』光文社

土井隆義、2003、『非行少年の消滅 個性神話と少年犯罪』、信山社出版会

土井隆義、2008、『友だち地獄 「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房

土井隆義、2004、『「個性」を煽られる子どもたち 親密圏の変容を考える』岩波書店

- 本田由紀、2014、『社会を結びなおす—教育・仕事・家族の連携へ』、岩波書店
- 牧野智和、2012、『自己啓発の時代 - 「自己」の文化社会学的探究』、勁草書房
- 宮台真司、1994、『制服少女たちの選択』、講談社
- 若林直樹、2009、『ネットワーク組織—社会ネットワーク論からの新たな組織像』、有斐閣
- 田中治彦、萩原健次郎編、2012、『若者の居場所と参加—ユースワークが築く新たな社会』、東洋館出版社
- 東京都不登校・中途退学対策検討委員会、2015、「中間まとめ」
<http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2015/10/60pam300.htm>
- 岡田朋之、松田美佐2002『ケータイ学入門—メディア・コミュニケーションから読み解く現代社会』有斐閣
- 森田洋司、1997、『不登校現象の社会学』、学文社

ヤング)、青木秀男ほか訳2007『排除型社会—後期近代における犯罪・雇用・差異』洛北出版

菊地栄治、永田佳之2001「オルタナティブな学び舎の社会学—教育の公共性を再考する」『教育社会学研究』68集

阿部彩2008『子どもの貧困—日本の不公平を考える』岩波書店

中西新太郎、高山智樹2009『ノンエリート青年の社会空間—働くこと、生きること、「大人になる」ということ』大月書店

乾彰夫編2013『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか: 若者たちが今大人になる とは』大月書店

玄田有史、曲沼美恵2009『ニート—フリーターでもなく失業者でもなく』幻冬舎

東浩紀2001『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』講談社

金馬宗昭2010『不登校・ひきこもり こころの解説書』学びリンク

野沢慎司(訳)2006『リーディングス・ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房